

2025年11月21日

T.Kobayashi

下総国分寺・国分尼寺跡を歩く

鎌ヶ谷市の道野辺あたりから南西に向かって流れる真間川は、下総中山駅の南側を北西から南東に向かって流れ、原木で東京湾に注ぐ。

松戸市の日暮付近から流れてくる国分川が、市川市の八幡六丁目で、真間川に合流する。

アルファベットの「Y」の字で言えば、左の股が国分川になる。

都市化が進み、平野と丘陵や小山の境目の地形が認識できにくくなっているが、市川市の北部から松戸市にかけて、海拔 20~30m の舌状台地になっている。

「Y」の上部、すなわち二つの川の合流点の間には台地があり、曾谷貝塚があり、古代から人が住みついていたことを表している。台地の中にある地名を拾うと、宮久保・曾谷など窪み（低地）が点在していることも想像できる。

「Y」字の西側には海拔 20~30m の丘がもうひとつあり、その西側には江戸川が南北に流れている。この台地が国府台であり、その名の通り、下総の国の国分寺・国分尼寺や国府があった所である。

11月17日、快晴で陽光が温かさを提供してくれてはいるが、かすかに木枯らしを感じさせる午後、曾谷公民館から県道264号線を西へ歩き、「市川南 IC 北」交差点を西側へ渡る。

市川駅から出る国分高校行のバスの「国分バス停」がある。付近は東京外環自動車道が国分川の西側を南北に並走し、昭和50年代後半に第二精工舎を訪ねた頃とは景色が一変していた。

●経王寺

交差点の西側から、車が一台しか通れないような道が高台に上っている。やや急な坂を上がっていくと坂の途中の左手に経王寺がある。正式名称は日蓮宗弘妙山経王寺。

千葉常胤の五男（千葉胤通）は千葉六党の一人で、市川の国分に城を構えて国分五郎と名乗っていた。国分五郎の居城があったのはこのあたりだと言われている。

●寶珠院

西に向かってさらに上っていくとT字路に突き当たる。「←下総国分寺」という板切れの表示に従って左に曲がると、左に寶珠院がある。

真言宗豊山派玉王山寶珠院が正式名称。順光法印の開基により元和7年（1621年）創建。

本堂の前に大きなやかんが鎮座している。何も説明が書いてないので帰宅後に調べてみたら、駄洒落が好きな住職が考え付いたもので、「夜間でも拝観可能」を意味しているとのことだった。

●下総国分寺

山頂のような所を南へ進むと下総国分寺の正面に出た。寺は南に向いて建っている。寺の正式名称は、真言宗豊山派国分山国分寺という。

朱塗りの南大門が堂々たるいでたちで構えていて、門の構えの中に見える本堂の姿がより厳めしく感じられる。天平13年（741年）の国分寺建立の詔勅に「寺名は金光明四天王護国之寺と為す」と記されており、長く国分山金光明寺と呼ばれていたが、明治22年に国分山国分寺と改称された。古くは戦国時代の国府台合戦を始めとして、何度かの火災で焼失している。現在の金堂は昭和初期に再建されたもので、南大門の位置は建立時より北に寄っているらしい。

墓地に入ると歴代の僧侶の墓石が並んでいて、刻まれた文字は「国分山金光明寺」となっているものが多くかった。いざこの国分寺も同じではあるが、広い敷地の中に個々の建造物があった場所を示す遺

構や説明板があるだけで、その説明を読みながら「往時の風景を想像する」のが国分寺巡りの楽しみ方なのかもしれない。

「←国分尼寺跡 500m」の表示に誘われてさらに北西方面へ足を運んでみることにした。

●天満宮

民家と畠が併存する細い道を歩くと、天満宮と書いた石柱に挟まれて小さな祠が建っていたが、特に説明の看板はなかった。神の言葉とおぼしき教訓めいた短文が彫られた石がいくつか建っており、土地の人が大事に守っている様子が感じられた。

●北下瓦窯跡(きたしたかわらがまあと)

畠や空き地が続き遠望が利くので景色を楽しんでいたら、空き地の角に看板が建っていた。

国分寺建造時に屋根瓦を焼いた登り窯があった所だと書いてあった。

発掘調査では、国分寺の各建物の場所、建造に使われた道具なども発掘されていて、この北下遺跡からは、瓦窯の工房の存在も明らかになっている。国土地理院の地形図によれば、北下瓦窯跡は、現在の市川北 IC の西側の国分バス停の北側の丘の上になっている。

国分寺の発掘調査では、9世紀中頃のものと思われる墨書きの土器が出土しており、この土器には「遊女」「酒」「馬」などの文字が書かれていたという。「遊女」という言葉が9世紀に存在していたことを示すもので、貴重な発見と言えるようだ。

●路傍の祠

道の曲がり角には木造の小さな祠が建っているが、文字が読み取れない。さほど古いものには見えないのでいつ頃のもののかはわからないが、神仏の領域に近づいているような味わいを感じる。

●国分尼寺跡

車がすれ違うのは難しいような細い道は、やがて北西に向かうようになる。畠の周りの住宅地を過ぎると、道を挟んで広い緑地が現れた。国分尼寺跡公園と看板が建ち、右側の木立の下で老婆がベンチに座っていた。左側は樹木が何もなくむき出しの草原になっており、礎石の位置などを示す丸いものがいくつも並んでいるのが見える。国分尼寺は南に向かって建っていたが、その敷地の中を斜めに道が横切っている感じだった。元は農道だったようで、新しく区画整理された道とともに残されていた。

●豪華邸宅

国分から台地へ上がっていく道や高台の上の畠と畠の間に、周囲とは規模の違う大きさの邸宅がいくつも建っている。古い造りの家は、名主か庄屋の家だったのだろうか。門柱に名字のほかに屋号も書いてある家もあり、木造三階建の周囲を睥睨するような家もある。

●明治以降の市川

天平の時代には下総国の国府があり、国分寺・国分尼寺があり、市川北部の高台は働く人なども含めてかなりの人が居住し往来していたに違いない。のちの世では武士が城を構える場所になり、それゆえに戦場にもなった。勝ちと負けは、建造と焼失であり、時代の流れの中でそれを繰り返してきた。江戸時代が終わり明治に入ると、我が国の各地に軍隊の施設ができあがり、大陸への進攻を繰り返すたびに施設の数は増えていき、やがてこの台地には帝国陸軍の主要施設が陣を張るようになった。そして、世界大戦に広がり、1945年までそれが続いた。

1945年を過ぎると、陸軍の施設だった所は、学校・住宅・緑地公園など新たな機能を持ったものに生まれ変わった。国府台を始めとする市川北部の高台を、地図を見ながら歩いてみると、残されているもの、消えてしまったもの、生まれ変わったもの、歴史遺産の様々な現状を感じることができる。

今だけを見ると、大事な過去を見落としてしまうような気がする、市川はそんな町だった。。



下総国分寺・国分尼寺跡を歩く

2025.11.17.

- ①国分からの上り坂
- ②寶珠院
- ③国分寺南大門
- ④国分寺本堂
- ⑤高僧の墓
- ⑥天満宮
- ⑦路傍の祠
- ⑧国分尼寺跡
- ⑨こんな家があった

